

外国語教育と現地教材の開発、現地校・補習校との交流授業開拓

前ブラッセル日本人学校 教諭

兵庫県立芦屋国際中等教育学校 教諭 貞松 千佳子

キーワード：異文化理解、異文化体験、異文化交流、外国語学習、自己実現

1. はじめに

この度ご縁があり、ベルギーにあるブラッセル日本人学校で中学校英語教師として3年間勤務させていただいた。実際に現地校と交流をしたり、本物の異文化体験をする中で、生徒たちは自然に、「もっと英語を話したい」「もっと相手校の生徒とコミュニケーションをとりたい」という気持ちを高められるのではないかと仮定し、3年間、中学部の現地教材の開発と現地校・補習校との交流授業開拓を行ってきた。その中でも特に印象に残っているのが、ヨーロッパで盛んに行われているプロカントを教材化し、「古いものの価値・魅力」について考える学習を行ったこと、毎年行われる現地校との交流の内容を新たに考え実践したこと、そして、いままで交流のなかったブラッセル日本人学校補習校中学2年生との交流学习を計画し、実践できたことである。以下に、その取り組みを紹介したい。

2. 赴任国（ベルギー）について

ベルギーは、西ヨーロッパに位置し、隣国のオランダ、ルクセンブルクと合わせてベネルクスと呼ばれる。首都のブリュッセルは、欧州連合（EU）の主要機関が多くあり、「EUの首都」とも呼ばれている。北部のフランデレン地域では、オランダ語の一種であるフラマン語が公用語として使われ、南部のワロン地域では、フランス語が公用語として使われている。南部のワロン地域では、ドイツ語が公用語の地域もある。

また、日本とベルギーは、2016年の今年、1866年に外交関係を樹立してから友好150周年を迎えている。これを記念して、両国において様々な分野で数多くの記念イベントが行われている。

3. ブラッセル日本人学校について

(1) 概要

ブラッセル日本人学校は、ベルギーの首都ブリュッセルにあり、今年度で創立37年になる。児童数は、小学部243名、中学部49名（平成28年4月）。教職員は派遣教員を含め33名である。朝8時30分から小学部・中学部ともに、朝読書の時間があり、8時50分から、小学部は45分授業、中学部は50分授業で進んでいく。毎週水曜日は、小学部・中学部ともに午前中みの授業（4時間）である。その分、中学部は、火、木曜日は、7時間目まで授業がある。また、中学部は月、金の6時間目の授業と終学活を終えたあとに、テニス、卓球、バスケットボールのクラブ活動を行っている。

(2) 特色ある教育実践

①外国語会話学習

ネイティブの講師による外国語会話学習が積極的に行われている。小学部1～4年生は毎日20分、小学部5・6年生は週3.5時間、中学部は、週4時間の日本人教師による外国語（英語）の授業とは別に、週3回の外国語会話授業ある。小学部1・2年生は、全員フランス語を学習し、小学部3年以上ならびに、中学部は英語かフランス語かを選択することができる。

②学校行事

中学部3年生修学旅行（5月末実施）

ドイツ・ベルリンへ2泊3日の修学旅行へ行き、チェックポイントチャーリー、壁博物館、ホロコースト記

念碑、強制収容所など平和学習を基調に学びを深める。また、初日の夜には、スーツを着て、ベルリンフィルのコンサートに行ったり、2日目の自由行動では、班別で事前準備で調べておいた場所を地図を持って自分たちで回っていく。

中学部社会見学（秋11月頃実施）

ベルギー地域学習、平和学習をそれぞれ隔年ごとに行っている。例えば、地域学習では、アントワープについて事前学習をした後、実際に現地へ行き、中央駅のアールヌーボー建築を見たり、ノートルダム大聖堂を見学したり、現地のガイドさんのお話を聞きながら進めていく。また、平和学習では、第一次世界大戦で毒ガスが大規模に使われ、多くの若い兵士が亡くなったイーペルを訪ね、墓地や戦争博物館を見学し、学習を進めていく。

4. 取り組みと成果

(1) プロカウント（古道具市）体験

- ・どんなものが並べられているか。・いくらで買われているか。
- ・なぜそれが買われていったのか、その人にとっての価値。
- ・自分がほしいものベスト3となぜほしいのか自分にとっての価値を調査した。体験前に、役立つ表現（英語・フランス語）を考えさせ、教え合い、準備させた。実際、生徒たちが使うことができた英語やフランス語の表現は簡単な表現が多かったが、楽しみながら他言語を使って会話をしようとしていたのは確かであった。初めてプロカウント体験する生徒がほとんどで、初めて触れる異文化にワクワクし、新鮮味があり楽しくて、その気持ちがさらに、「英語やフランス語を使ってみたい」という気持ちを高めた。もっと様々なことを質問し、なぜその品物を買いたいのか深く知りたいという気持ちが表われたが、話す表現も難しく、また話してくれた内容を聞き取り理解するのも難しく、悪戦苦闘していた。ただ、悪戦苦闘するなかで、「こういうこともできるようになりたいから、もっと英語・フランス語を勉強したい。」という気持ちが出てきて、今後の外国語学習に対する意欲が高まったのも確かである。使えた、通じた喜びと、うまくいかず悪戦苦闘したが次こそはという次の目標が生まれて、外国語学習に対する意欲を高めることができた。



(2) 現地校との交流

- ① 平成25年度2月、現地校のヨーロッパンスクールとスポーツ交流を行った。生徒たちの感想に、「スポーツ交流も良かったが、もっと話す時間もほしかった」というのがあった。そして、このような交流を様々な学校と行うことも良いとは思いますが、1つの学校で交流を積み重ねていくことも、より深みのある信頼関係を築けていけると思うので、可能であれば同じ学校との交流をしたいと考え、計画していった。平成26年度には、同校から、スプリングフェスタへの参加のお誘いがあり、また、平成27年度には、同校のスプリングフェスタに参加させていただくだけでなく、当校の運動会の伝統の出し物（ソーラン節）をステージで披露する機会もいただいた。自分達の文化を発信する場をいただき、それがどれだけ生徒達の達成感を高めたかは、生徒の感想から読み取ることができた。
- ② アテネロワイヤル・モルロンウェイ校との交流も、2年連続行うことができた。26年度は、当校へ来校していただき、27年度は、訪問させていただいた。26年度の生徒からの感想をもとに、新たなアクティビティを考え、26年度とは違う活動を27年度には行うことができた。それは、当校の生徒が相手校の生徒に1対1でお習字を教える活動であった。前回の交流での反省で、使える英語をもっと準備しておくべきであったと感じていたので、今回は事前学習にも力を注いだ。習字で書く字は、相手校の生徒の名前の「音」からもじった日本語の漢字。前もって、相手校の生徒の名前を聞いておいて、前向きな意味のある漢字を探し、名前を付ける作業を行った。そして、どうしてその漢字を選んだのか、その漢字にはどういう意味があるのか、英語で説明で

きるように準備させた。また、お習字のやり方を見本を見せたり、ジェスチャーで示す際、その動作とともに、英語の文を添えながら相手に伝えられるよう、事前に当校の生徒同士にシュミレーション練習をさせ、その時に使う英語を考えさせながら実際に英語を発しながら伝える練習を行った。



この事前練習は、成果があったように感じる。アイスブレイキングアクティビ

ティで固まってしまう、なかなか英語を話すことができなかった生徒が何人かいたが、この習字の活動では、事前にシュミレーション練習をしていたので、それを積極的に実際に使いながら相手に伝えようとする姿が見られた。この活動は、私がここベルギーにいる3年間の間にぜひやってみたいことの1つであったが、大成功だったと感じる。一生懸命、日本の文化である習字を習った英語を使って伝えようとしている姿を見ると、企画して本当に良かったと思うことができた。

(3) ブラッセル日本人学校補習校との交流

ブラッセル日本人学校の補習校（土曜日のみ）との交流は今までなかった。しかし、同年代で、日本国籍をもちながらも、ベルギー国籍を持っている生徒たちがたくさん通っており、彼らは、日本、ベルギーをどのように捉え、どのように感じているのか。意見交換を通して、同年代の生徒たちが互いの意見を聞き、自分の意見を述べ、考えを深めていってほしいと考えた。また、補習校との交流を通してでも、生徒たちの外国語学習に対する意欲を向上させるきっかけを作れるのではないかと考えた。まず、補習校の生徒たちと普段は会えないが、グーグルドライブアカウントを作成し、インターネット上で意見を交わしあうことができるようにした。また、互いに作成したプレゼンテーションを見合い、その意見も書き込みさせた。最後は、合同授業を3時間行うことができた。プレゼンテーション発表、ワールドカフェ、パネルディスカッションを行った。生徒たちの感想には、「外国語を学ぶ事に興味を持てたし、頑張ろうとも思った。大事なのは、この交流のような「コミュニケーション」だと思う。現地校との交流にもつなげていきたい」、「外国語学習に対する意欲向上につながりました。1番の理由は、直接会うことができたことです。補習校の人達は皆、英語や仏語がペラペラでした。かっこいいと思ったのと、苦勞してここまで話せるようになったんだなと思いました。そのような姿を見て、自分も英語を話せる努力をしなくてはと思いました」、「パネルディスカッションの時に、補習校の人達が発言しているのを聞いて、考え方が広いなと思いました。また、話せる言語が多いのは、ここまで違うのかと思いました。大人になるまでに、日本語、英語ともう一つ身に付けたいと思いました」というものがあり、私自身も達成感を感じられる交流となった。

5. おわりに

ブラッセル日本人学校勤務の3年間、生徒の外国語学習に対する意欲向上のために考えた活動をすべて実行させていただいた。今までにない初めての試みであっても、快く実践させてくださった管理職の先生方に感謝している。ここベルギーでしかできない生の、実際の国際理解、体験、交流の活動をたくさん計画してきた。フランス語を話せるコーディネーターを通さないと交渉できない交流はなかなか思うように計画を立てられなかったが、自分の力で計画が立てられる活動は、やればやるほど、次にやってみた活動が思い浮かび、私自身が夢中に取り組んでいた。そして、毎回の生徒の感想から読み取れることは、どの活動も実際に人と言葉を交わしたり、関わりを持つことが、今教育活動の中で行っている外国語学習に対する意欲を向上させているのだということである。真の体験ほど意欲を掻き立てるものはないと確信できた。生徒が素直に感じた感想を心にしっかり受けとめ、今後も外国語教育の在り方を模索し、自分なりに研究を積んでいきたいと思う。